

「尾根と谷 (4)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

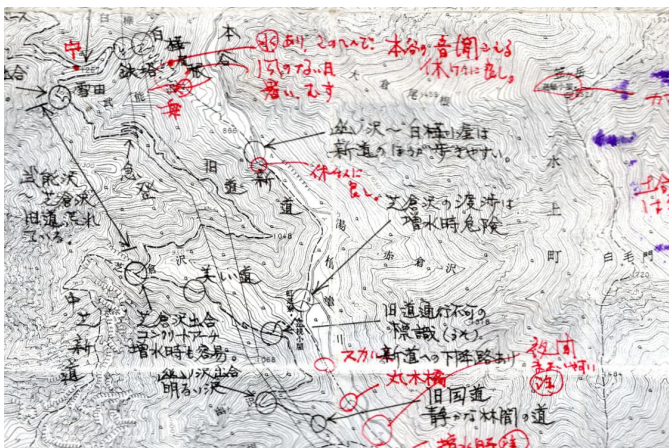
お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

谷川岳を中心とした山峰は、山の仲間の間では「上越国境」と呼ばれている。「上」は上州(群馬県)、「越」は越後(新潟県)をさす。群馬県側は利根川水系、新潟県側は信濃川水系で、太平洋と日本海に雨水を分ける「大分水嶺」の一部を形成している。

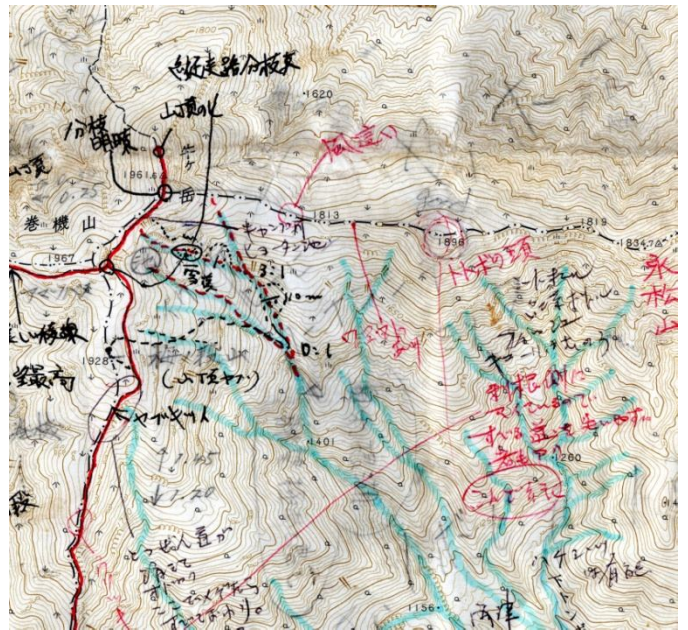


遭難の多い山ではあるが、標高は2000メートルにも満たず、北アルプスや八ヶ岳に比べると、決して「高山」とは言えない。しかし、特に冬の気候は厳しく、大暴風雪を伴う大豪雪地帯となっている。あまりにも厳しい気象環境なので、低い山にもかかわらず、山頂付近の尾根には目立つ樹木は全く見られない。草原またはスズタケ(笹原)に覆われていて、わずかにハイマツがあるだけだ。森林限界の標高が低いのだ。



私はこのあたりの登山路、縦走路は歩きつくし、相当に細かい地形まで頭に入っている。当時の地形図を見ると、歩いていない道はもうないことがわかる。

「国境稜線」の群馬県側は、利根川の源流部(水源)を成している。私は一般登山道を歩きつくしたので、その源流部の谷筋を歩き始めた。もちろん道はない。ハイ松と笹ヤブを分け入る、「ヤブコギ」をしながら進むのだ。



特によく歩き回ったのが、谷川岳の北へ延びる国境稜線の尾根の北端にある「巻機山(まきはたやま)」と「牛ヶ岳(うしがたけ)」の周辺だ。上地図で、 $\text{---}\cdot\text{---}\cdot\text{---}\cdot\text{---}\cdot\text{---}$  の記号が、群馬県と新潟県の県境(上越国境)を表し、ほぼそのまま分水嶺を意味している。図でいうと、右下側が群馬県側で、利根川の源頭(最上流部)を形成している。私が使っていた当時の地形図には、谷筋(谷)に青い線を入れて、わかりやすくしてある。



現在では上図のように、国土地理院のホームページかで、簡単に陰影起伏図を作成でき、地形の様子を直感的に把握できるが、当時の登山者には、紙の地形図を読図する技量が強く求められていたのだ。